



コメリン『東インド会社の起源と発展』扉絵  
(オランダ語版、アムステルダム、1646年刊)

17世紀前半にオランダ東インド会社は、ポルトガル人が当時築き上げていたアジア貿易の独占をまたたく間に打ち破り、それから百年の間、喜望峰から日本に至る中間貿易の支配に成功した。東インド会社はこの独占の特権を守るため、できる限りほかの競争相手に情報が漏れないように秘密主義を貫き通した。このような東インド会社の秘密主義を打開した最も重要な出版物が、コメリンの『東インド会社の起源と発展』である。本書は2冊4部から成り、数多くの旅行記のほかに、それまで出版されたことのない東インド会社文書も複数挿入されている。その中には日本に関する極めて質の高い資料が編纂されており、それらの資料は日本の文化や日本における東インド会社の役割に関する全体像を与えてくれる貴重なものである。『東インド会社の起源と発展』の扉絵には、中央に王座に座るふくよかな女性が描かれている。この女性がアジアの女神を象徴していると考えられる。右側に西洋人の商人らしき人物たちが商品を王座の下に並べ、女神を見上げている。また、左側には剣を取り出してお互いに戦っている西洋人の商人が描かれているが、これは、アジアの富をめぐるポルトガル人とオランダ人の戦いを象徴していると思われる。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）